

平成 22 年度事業報告について

1. 文化財研究所事業

発掘調査（138 件）と報告書作成（17 冊）の事業量が特に増大した一年であった（参考：H21 以前の 5 年間平均で調査約 80 件、報告書約 7 冊）。難波宮の宮殿を飾った白壁片が多量に見つかったこと、古墳時代の国産化初期の須恵器窯が見つかり、古墳時代における上町台地の先進性を示すなど、全国的にも話題になった重要な発見が相次いだ。一方、20 年にわたり調査拠点の一つであった平野区長原調査事務所が東淀川区東淀川調査事務所へ移転したが、引き続き事業量の見込まれる市内南部での調査拠点および併設されていた展示室の確保が必要である。

1. 埋蔵文化財の調査及び報告書作成

(1) 発掘調査事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成 22 年度の発掘調査は契約件数 138 件〔115〕件、調査面積 33,425〔23,629〕m²、受託額 1,180,150,025〔814,765,733〕円（税抜）であった（埋蔵文化財調査・収蔵施設移転業務を含む）。前年比で受託件数は 20.0%、面積では 41.5%、金額では 44.8%（約 3 億 6 千 5 百万円）の増加となった。報告書作成受託収入と合わせた委託相手別の金額比率は、大阪市関係が 62.61%〔72.45%〕（70〔59〕件）、大阪府関係が 0.36%〔2.22%〕（1〔1〕件）、国が 25.26%〔7.88%〕（5〔3〕件）、民間が 11.77%〔17.45%〕（80〔61〕件）となった。大阪市からの受託額は 21 年度の総額約 6 億 4 千 6 百万円弱から、22 年度は総額約 7 億 9 千 8 百万円に増大し、引き続き大阪市との契約額が最大であった。民間事業者からの受託額は約 1 億 5 千 2 百万円で、前年度並みであった。

本年度のおもな発掘調査成果では、難波宮に関連するものが特筆される。中枢部周辺では、東方官衙の東に延びる開析谷に廃棄された焼壁が出土し、飛鳥時代の宮殿建物の壁体構造に関する初の知見を得た。また、難波宮前史を語るものとして、法円坂遺跡に近い位置で大阪市内初めての須恵器窯 2 基が見つかり、上町谷窯と名付けられた。5 世紀中葉ごろの法円坂遺跡に先行する関西でも希少な最初期の須恵器窯で、国際交流や生産・技術における上町台地の先進性を示す重要な発見である。

そのほか新発見の平野馬場遺跡で古墳時代前期の集落が見つかった。中世では、住吉行宮跡で歴代宮司津守氏の居館に係ると考えられる遺構（井戸）や、長原遺跡では中世後半の堂跡などを発見した。近世では、大坂城天守閣北側の山里丸で徳川期大坂城の創建に遡る雁木跡や、蔵屋敷に関連して高松藩で大型蔵跡、佐賀藩で鍋島焼の資料を調査することができた。

これらをはじめとする調査成果は、新聞報道（計 18 件）によって市民へ伝えられるとともに、調査現場の公開（難波宮跡 2 回、大坂城跡 1 回）や大阪歴史博物館での遺物やパネルによる展示などを通じて広く公開された。

なお、20 年にわたり平野区長吉長原にあった大阪市埋蔵文化財収蔵展示室が、大阪市の

用地売却に伴って移転することとなり、それに伴う文化財の移転作業を行った。あわせて同所にあった長原調査事務所も東淀川調査事務所と巽北保存科学室へ移転した。

(2) 報告書作成事業

平成 22 年度は合計 17 冊の報告書を刊行した。淀川区加島 1 丁目所在遺跡・西宮原遺跡・北区中崎町遺跡・阿倍野区北畠公園遺跡・浪速区大国遺跡など、新発見遺跡や従来詳細の不明であった遺跡などの調査報告書を刊行し、大阪市域の新たな遺跡情報を公開した。『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XIVは昨年度に報告書作成業務を受託し、今年度は印刷のみを行った。ほかに、引き続き刊行予定の『長原遺跡東部地区発掘調査報告』の報告書作成作業を行った。以上の受託金額は約 1 億 1 千 4 百万 [7 千 6 百万] 円で、昨年度の 50% 増となった。

このほか過年度調査 (28 件) の報告書作成作業を行った。

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業			合計	
	件数	面積	受託額		件数	受託額			
国関係	5	5,579	326,958,000	27.70%	-	-	0.00%	326,958,000	25.26%
大阪府	-	-	-	0.00%	1	4,602,000	4.02%	4,602,000	0.36%
大阪市	53	16,673	688,405,566	58.33%	17	109,783,000	95.98%	810,548,566	62.61%
	(1)	-	12,360,000	1.05%					
民間	80	11,173	152,426,459	12.92%	-	-	0.00%	152,426,459	11.77%
合計	138	33,425	1,180,150,025	100.00%	18	114,385,000	100.00%	1,294,535,025	100.00%

※「大阪市」()内の埋蔵文化財調査・収蔵施設移転業務は受託額のみ合算する

表 平成 22 年度発掘調査・報告書作成受託事業の内訳

2. 文化財関連施設の管理受託

昨年度に引き続き、難波宮史跡公園及び 5 世紀代建物、大阪市埋蔵文化財収蔵展示室の管理を行ったが、先述の大阪市埋蔵文化財収蔵展示室の移転作業に伴って、同展示室ならびに難波宮資料展示室での公開期間が短縮されたことで見学者は減少した。難波宮史跡公園及び難波宮資料展示室の見学者は 20 [69] 件、614 [1,510] 人であった。そのなかにはガールスカウト日本連盟大阪府支部の史跡公園清掃奉仕 (5 回 197 人 [200] 人) や、市内小学児童・中高校生 (4 件 256 人) などがある。大阪市埋蔵文化財収蔵展示室でも、市内小学児童 (4 件 317 人) をはじめに 31 [52] 件、482 [576] 人の見学に応じた。

また、平野区の大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫などの整理作業を行い、文化財の収蔵状況を系統的に調査して保管位置や中身について確認し、外部からの資料の閲覧・貸出依頼に対応できるよう努めた。

3. 文化財の保存処理・分析、学芸員による他団体への調査協力

保存処理・分析に関しては、大阪歴史博物館の館藏品修復のほか八尾市・藤井寺市・堺市など大阪府下 6 件、大阪府以外の近畿圏 3 件、その他 (財) 高知県文化財団、鳥根県埋蔵文化財

調査センター、大田市、今治市、総社市教育委員会など 10 件の事業を受託した。処理の対象となった資料には多様な木製品や金属製品がある。以上の保存処理・分析業務の受託額は 11,211,900 [8,320,878] 円であった。

4. 文化財の普及啓発

(1) 講演会・シンポジウム

大阪歴史博物館において「金曜歴史講座」を主催し、12 回に渡り計 1,513 人 [12 回 / 1,619 人] の参加を得た。また、科学研究費補助金基盤研究 (A) による研究公開事業として『シンポジウム大阪上町台地から都市を考える』の「1 難波京復元—新発見! 古代の橋と条坊景観—」および「2 寺社と中世都市—京都・博多・大坂—」の 2 回を開催し、いずれも 200 名前後の参加者があった。毎年行っている大阪歴史博物館との共催展示「新発見! なにわの考古学 2010」に合わせて『大阪の歴史を掘る 2010』講演会を開催し 210 名の参加を得た。

(2) 地域講座と地域連携

外部団体からの依頼で、当協会が企画し講師を派遣した連続講座として、おもなものに大阪市教育振興公社「いちよう大学 大阪の歴史と考古学 (専任講師を含む)」(13 回: 旭区)、平野区誌出版記念連続講座「わがまち平野区 そのなりたちを学ぶ」(5 回: 平野区)、平野区画整理記念会館 住民大学講座「考古学から見た石造物の歴史」(7 回: 平野区)、平野区民協働企画講座「歴史ウォーク-遺跡巡り-」(3 回: 平野区)、阿倍野区地域協働学習プログラム「阿倍野区歴史講座」(1 回: 阿倍野区)、大阪市立市民交流センターすみよし北「なにわ考古学散歩」(11 回: 住吉区) などがあり、合計 17 件の講座に対し、42 人の講師を派遣した。また、民間団体や区民など外部団体との共催またはその依頼により、2 件の新規常設展示、2 件の期間展示を民間施設や公共施設などで行った。

地域のイベントへの参加・協力では、「大阪あきない祭り」(大阪市教委と共同)、「中央区民まつり」(難波宮資料展示室公開: 42 人)、「BK85 ワンダーランド・秋」、「六反長原古代市」での遺物資料展示・ワークショップ開催などがある。また、昨年度に引き続き、難波宮史跡公園を会場とした「アクションペインティング in 難波宮 2010」、「難波宮フェスタ! 2010」を市民団体と連携して実施し、当日はワークショップなどを行った。

(3) 学校連携

大阪歴史博物館と共同し、難波宮跡における大阪市内小学生を対象とした「体験発掘」(9 校 652 人)、「なにわ歴博わくわく子供教室」(体験発掘)を企画・実施した。また、中学校の依頼による職業体験学習(2 校 15 名)を受け入れたほか、大学博物館実習(2 校 45 名)、教員実習(24 名)などへ対応した。その他、大学非常勤講師への講師派遣(3 名)を行った。

(4) 「関西・考古学の日」の開催

全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロックの法人が連携し、9 月～11 月の 3 ヶ月間で、

各団体が計画した展示、講演会・講座、遺跡公開などの事業を、共同で広報・宣伝する企画を考案した。共同のホームページやチラシを活用し、各参加団体を巡るスタンプラリーを開催することで市民の関心を高め、多くの参加者を得た。また、中核行事として 10 月 9 日（土）に「関西・考古学の日記念 記念講演会「縄文のアートと文化」」を滋賀県立図書館で開催した。

(5) 資料の活用

7 月 28 日（水）～9 月 20 日（月・祝）の間、9 回目となる大阪歴史博物館での特集展示「新発見！なにわの考古学」を開催し、速報性や話題性を重視して約 400 点の遺物を展示した。また、大阪市内の企業・公的機関・学校などから依頼を受けて開設した展示施設（「街角ミュージアム」など）は 37 箇所、展示資料は 2,332 点を数え、本年度は、新たに中央区や西成区の民間施設における常設展示を加えることができた。ほか、大阪市立クラフトパーク・平野区民センターの期間企画展の制作・協力を行った。

研究所が保管している資料の貸出は、特別展など短期貸出 19 [19] 件 235 [417] 点であったほか、出版などのための写真・図の提供は 79 [78] 件、資料調査・見学対応は 17 [20] 件であった。

(6) 情報発信

文化財情報誌『葦火』を年 6 回（145～151 号）刊行した。定期購読者は 151 [153] 人であった。ホームページでは講座や現地説明会などをはじめとするイベント、出版に関する情報を掲載した（22 年度接続 46,499 [61,008] / 累計 420,481 件）。

5. 文化財に関する研究と支援・交流

科学研究費補助金基盤研究（A）・（C）として 5 件、1,339 万円を獲得した。図書は交換・購入により約 603 [2,041] 冊を登録した。その結果、研究所図書は 75,244 [74,641] 冊で、外部の閲覧にも供した。

なお、奈良文化財研究所の埋蔵文化財担当者専門研修、長崎県の発掘調査・遺物整理指導、大韓民国の全北大学校伝統生活文化原形構築および応用企画専門家育成事業による招聘に対し、学芸員計 4 人を派遣した。

2. 大阪歴史博物館管理運営事業

当館では、大阪大学と共催で特集展示「懷徳堂展」を開催し、また大阪市立自然史博物館とは、淀川を共通テーマとして特別展「水都大阪と淀川」を開催するなど、大学や他の博物館との連携事業を積極的に展開し、博物館活動の幅を広げることができた。あわせて大阪城天守閣とのセット入場券も作成し、来館者サービスの向上に努めた。

また、特別展「水都大阪と淀川」では、新たな試みとして市民参加によって調査した淀川流域の歴史マップを特別展会場で展示し、観覧者から好評を得た。

1. 資料の収集、保管事業

購入資料として辛基秀コレクションの金剛山図屏風を含む3点を収蔵した。寄付資料に関しては、資料収集方針にもとづき、江戸時代の大阪の書肆・文海堂敦賀屋資料など歴史資料1,838点、田能村直入筆の名花十友図など美術資料403点、をぐらや看板など民俗資料6点、年寄藤嶋所用の明荷など芸能資料104点、ダイビル本館テラコッタなど建築資料17点、合計2,371点(前年1,124点)を整理・燻蒸し、収集・保管した。この結果、当館で保管する館蔵品は118,882点に達した。

2. 展示事業

(1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、前期難波宮の壁土などの最新の発掘資料のほか、各フロアやコーナーにおいて開催中の特別展と関連した館蔵品を適宜更新するなど、年間31回の展示替えを実施し、常設展示の充実にも努めた。また学芸員による常設展示の展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に合計163回を実施し、1,629人(前年1,539人)の参加を得た。こうした事業や次の特集展示の展開により、本年度の常設展示入場者数は、前年度(180,558人)比12.4%増の203,030人となった。

(2) 特集展示

特集展示室では、大阪市内の最新の発掘成果を紹介する「新発見！なにわの考古学2010」のほか、平成20・21年度年の新指定文化財、近世大阪の画家、関西の建築界を取り上げた展示をおこなった。また大学連携の展示として懷徳堂の展示など、年間7本の特集展示を開催した。なお9月から10月にかけて、特集展示室において、近代美術館建設準備室と当協会が主催し、「大阪市立近代美術館名品展」として「大阪に集まった12の名画」展を開催した。

(3) 特別展示

特別展は、本年度6つの展示を開催した。自主企画展が3つ、巡回展が2つ、単独企画展が1つであった。自主企画展の「華やぎの装い—鴻池コレクション展—」(平成22年7月14日～8月30日 会期42日間)では、鴻池家寄贈の館蔵品のなかから、小袖や化粧道具など女性の暮らしに関する資料を中心に構成し、あわせて11代当主の趣味の品々など加えて豪

商の華麗な暮らしぶりを紹介した。

「新淀川 100年 水都大阪と淀川」（平成 22 年 9 月 18 日～11 月 15 日 会期 51 日間）は、共同研究「淀川地域の歴史と文化に関する総合的調査研究」の成果をもとに、都市大阪の形成と発展の歴史を淀川との関わりで取り上げた。淀川下流域の史跡や暮らしの痕跡を市民との共同調査でまとめた「淀川歴史マップ」は、市民参加型の事業が特別展の展示にもつながる初めての試みであった。

巡回展「発掘された日本列島 2010」（平成 23 年 1 月 12 日～2 月 28 日 会期 42 日間）に合わせて同時開催した自主企画展「なにわの考古学 30 年の軌跡一足の下に眠る歴史―」（平成 23 年 1 月 12 日～2 月 28 日 会期 42 日間）では、大阪市域での発掘調査によって見つかった代表的な資料に加え、本格的な遺跡発掘調査が始まる前に発見・採集された資料や、大阪以外の博物館施設で収蔵されている資料も里帰り展示をした。

巡回展のうち、「お守り刀展覧会」（平成 22 年 11 月 27 日～12 月 26 日 会期 26 日間）は、お守り刀をつくる現代刀工の新作刀とその外装の優品を展示するもので、コンクールで選ばれた約 40 件の現代刀に加え、当館独自の企画として、国宝 3 件、重要文化財 4 件を含む鎌倉時代から江戸時代にかけての代表的な日本刀約 20 件を合わせて展示した。

「発掘された日本列島 2010」は、文化庁主催で全国巡回する展覧会で、平成 20 年度～21 年度を中心に国内の発掘調査で見つかった埋蔵文化財のなかから約 450 点を紹介した。

単独企画展の「昭和のおもちゃとマンガの世界」（平成 22 年 4 月 18 日～6 月 21 日 会期 56 日間）は、ブリキ玩具の収集で著名な北原照久氏のコレクションの中から思い出深いおもちゃとマンガ約 2,000 点を一堂に展示したもので、世代毎に自分が育った昭和の世相を回想しながら楽しめる企画展として好評を博した。

これらの特別展では、合計 109,435 人の観覧者を得た（昨年度比 1.9%増）。また、当館では、「新淀川 100年 水都大阪と淀川」を外部評価の対象事業とした。

3. 調査・研究事業

難波宮と大阪学の研究を 2 本柱とし、昨年度から継続して「難波京」、「淀川」、「大阪の近代美術工芸」、「下郷コレクション」をテーマに 4 つの共同研究を実施した。研究成果については「共同研究成果報告書」や「なにわ歴博講座」などをとおして発表した。また基礎研究としては、大坂町奉行書例規集の研究、館蔵近世大坂関係古文書に関する教材開発、大阪と江戸・東京との都市比較史研究の 3 テーマを実施した。

外部資金による研究では、科学研究費補助金（390 万円）を獲得し、同基盤研究(C)2 本、同若手研究（B）2 本をおこなった。また「淀川」に関する共同研究に関わって（財）河川環境管理財団から助成金（110 万円）を得て、共同研究の一部をおこなった。

なお、当館学芸員が難波宮研究の一環として、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所と共同で史跡難波宮跡公園での発掘調査を実施し、前期難波宮の建物基壇等に関する知見を得るとともに、1 月には近隣住民を対象とした現地公開を実施した。

4. 教育・普及事業

教育普及事業としては、市民の歴史学習を支援するため、金曜夜間の学芸員による「なにわ歴博講座」や、大阪文化財研究所との共催による「金曜歴史講座」のほか、難波宮や大阪の歴史をテーマにした3回のシンポジウム、古文書・仁徳天皇・建築に関する学芸員の連続講座、近代建築を訪ね歩く「建築史探偵団」や「昔の観光地を旅する」などの見学会のほか、「大阪アジア映画祭」「優秀映画鑑賞会」など映画関係の事業を充実させ、新たな博物館利用者の開拓に努めた。また特別展や特集展示に関連して、シンポジウム・講演会・講座・見学会・ファッションショー・ワークショップなど多彩な行事やイベントを開催した。これらの事業は合計2,021回を実施し、総計27,603人の参加者を得た。

子どもを対象とした「わくわく子ども教室」では、小学校高学年を対象とした「考古学講座」（定員50人）、中学生を対象とした「歴史講座と体験発掘」（定員50人）を事前申込制の事業として実施し、90人の参加を得た。常設展8階での毎月第1土曜に開催の拓本体験やバイゴマづくり体験には、年間236人の参加があった。また、季節に合わせて開催した夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には119人、正月の「凧づくりと凧あげ」には23人の参加を得た。なお、1階オープンスペースで毎月2回開催している「手作りおもちゃで遊ぼう」は、おもちゃ作りサポーターによる協力のもと23回実施し1,328人の参加者があった。

次に、ボランティアについては、市民参加型博物館をめざす事業の一環として、159人の登録ボランティアにより、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・文楽人形操り・明治の双六遊びなど6種のハンズオン、8階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施した。ボランティアの活動は休館日を除く年間307日で、延べ4,755人が活動をおこなった。また、ボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的に、7月から3月にかけて講習や他施設の見学など、年間13回の研修を実施した。

なお、平成22年度に活動中のボランティアについては、3月末に2年間の活動期間が終了するため、平成23年度から活動するボランティアの募集をおこなったところ、継続希望者も含めて217名の応募があり、応募者には、2月から3月にかけて、6回の研修を実施した。

5. 学校・市民等との連携

学校連携としては、教員等に対する研修、中学生等の職場体験、小学校高学年の発掘体験のほか、大学生の博物館実習の受入をおこなった。

教員等の研修では、大阪市教育センターとの共催で、「大阪市教員研修」・「大阪市教員養成講座」を実施した。また、大阪市教育委員会による「大阪市外国語指導助手研修」、大阪府教育センターによる「大阪府教員初任者研修」を受け入れた。中学生等の職場体験としては、6校46人を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。体験発掘については、11月9日から15日にかけて大阪市小学校社会科研究会の協力を得て、9校652人を対象に実施した。大学生の博物館実習については8月から9月にかけて延べ12日間で11大学48人を受け入れた。また、博物館見学研修については7大学184人を受け

入れた。

市民等との連携では、上町台地を拠点に活動する NPO 法人との共催により、「うえまちコンサート」や「上町台地歴史講座」を開催した。また、別の NPO 法人とは、難波宮の発見者である故山根徳太郎博士の命日にちなみ、7 月 28 日に「難波宮フェスタ 2010」として講演会・ワークショップ・石組み遺構特別公開などを実施し、1,400 人を超える参加者を得た。

6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知する目的から積極的におこなった。特に web 関係では展示・普及事業にかかわる案内をすべて掲載し、年間で 281,524 件のアクセスがあったほか(1 日平均 771 件、前年度比 93.1%)、今年度は携帯電話を対象としたモバイルサイトを立ち上げたほか「なにわ歴博ブログ」も新規に運用を開始し、若年層利用者の掘り起こしを目指した。年間行事予定表やなにわ歴博カレンダー(4 回各 2 万部)、子どもを対象とした「なにわれきはく新聞」(4 回各 12 千部)などの PR 用紙媒体も発行し、多様な来館者ニーズに応えた。

7. 来館者サービスの向上

利用促進をはかりながら来館の楽しみを感じてもらおう目的で「大阪歴史博物館スタンプカード」制度を導入している。展示を観覧するとスタンプの押印が受けられ、6 個たまると展示小冊子『展示の見所』などと引き換えられる特典があり、今年度は 711 人の引き換えがあった。また、館内のレストランとの連携により特別展観覧者への入館割引または飲食割引のサービスを実施している。新規の取り組みとして 12 月より大阪城天守閣とのセット入場券(常設のみ)を導入した。大人が 25%引きという設定で、3 月末までに 3,000 人余りの利用者を得て好評を博したが、今後も増加をはかるべく周知を進めている。

8. 施設の維持管理

建物設備の維持保全のため、空調をはじめとする電気、機械設備などの機器・装置の日常点検のほか、定期メンテナンス、法定点検などを実施し、良好な施設設備の維持に努めた。

また、経年劣化等による機器の不具合に対応し、本年は特に一部の空調関係機器の部品交換、オーバーホールを行った。蒸気配管の劣化については大改修が課題となっているが、部品交換等応急的な補修により蒸気漏れ等の故障に対応した。

老朽化に伴う保守困難や障害が頻発していた情報システムは、緊急の改修が必要な箇所について最低限のソフト・機器を更新し、安定化を図った。

入場券の発券業務については機器、システムを更新し、業務のスピード化を図り、お客様より好評を得ている。また、館内外の日常的な清掃に努め、カーペットクリーニングなどの定期清掃を実施し、建物の美観を保つように図った。

防火・防災に関しては当館、NHK大阪放送局、ビル管理会社が一体となった訓練を行い、

非常時の対応について三者で確認を行った。

9. 友の会 その他独自事業

自主運営団体である友の会については、5月に総会が開催されるとともに、「町人文化を歩く」「街道を歩く」「資料館を歩く」「大阪城の石垣を学ぶ」「史跡めぐる」(新規)の5つをテーマとした見学会、また「オノコロ島を訪ねて」の日帰りツアーなど、計21回の事業がおこなわれ、1,057人の参加者があった。なお、当館は、事業の企画や講師の派遣などをおして友の会の活動支援をおこなった。

その他、独自の事業として、7月から8月にかけて、旭屋書店本店にて当館の図録フェアを開催し、展示図録等の販売・普及に努めた。また、平成23年1月からは、ジュンク堂書店大阪本店にて、展示図録等の常備販売をスタートさせた。

3. 大阪市立自然史博物館管理運営事業

2回の特別展を開催し、それぞれに特色を出せた展示となった。「みんなでつくる淀川大図鑑」は、4年間にわたって市民と共同で進めたプロジェクトYの成果をもとに、展示もプロジェクトY参加者と作り上げ、外部評価委員会でも高い評価を受けた。「大恐竜展」は多数の関連イベントとともに盛り上がり、予想をはるかに上回る約17万5千人（当館特別展入館者数としては歴代2位）の入館者を迎えることが出来た。

1. 資料の収集、保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じ海外からも収集してきた。収集した標本は低温燻蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。22年度に寄贈を受けた主なコレクションは以下の通り。三重県のカワウ・ミズナギドリ類（56点）、西表島の鳥（84点）、広島県太田川流域の昆虫（13,846点）、日本産甲虫とハエ（520点）、大阪南部のシダ（1,058点）、新名神高速道路の生物標本（高槻～箕面間）の植物（1,391点）、本郷次雄菌類コレクション（約7,000点）、日本および世界の鉱物標本（500点）。またプロジェクトYの成果の一部として、淀川水系の生物相に関する1万点以上の標本を収集した。

こうした活動の結果、平成22年度末の総資料数は145万9618点に達した。（昨年度末比31,202点の増加）

2. 展示事業

平成22年度の常設展、特別展を合わせた総入館者数は、320,062人、うち有料101,911人で、これは、前年度有料入館者71,052人に比べ43.4%の増である。

(1) 常設展示（観覧者総数167,869人）

本館の常設展示は、1986年に改修された一部を除き、多くが1974年の開館当初のもので、内容の陳腐化・展示物の劣化が目立っている。平成18年度から19年度には、旧第4展示室と旧特別展示室をあわせて新第5展示室に更新したが、引き続き展示更新は実行できていない。中長期的な視野に立った系統的展示更新を企画し、実施に向けて検討している。

その中、満足度向上もめざして「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「自然史博物館探検クイズ」等の館内行事を実施し、来館者サービスにつとめている。

平成22年度には、下記の常設展示の更改・補修等を行った。

・ハンズオン展示等の補修（第5展示室）

第5展示室「生き物の暮らし」は、いわゆるハンズオンの部分も多く、どうしても展示物の傷みは、激しくなる。これまで、そのつど小修理を繰り返してきたが、22年度には「27A 生き残るのは大変」「29C たどりつける？ 生きのびられる？：島の生物地理

学」 「35 さまざまな環境を行き来する生き物」のコーナーについて、展示物の耐久性を高めるために、やや規模の大きな修理を行った。

(2) 特別展（観覧者総数 152, 193 人）

① 「大恐竜展～知られざる南半球の支配者～」

（平成 22 年 3 月 20 日～5 月 30 日 会期 平成 22 年度 52 日間）

（読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催）

恐竜の起源は南半球であろうと考えられており、そこでの資料を抜きにしては恐竜進化について語ることはできない。また、恐竜の進化は超大陸パンゲアの分裂と同時代であったため、大陸分裂と深い関わりを持っている。本特別展の展示は、これらのテーマに基づき内容となっている。ティラノサウルスを始めとする、北半球の恐竜との比較もしつつ展示した。

② 「みんなでつくる淀川大図鑑 - 山と海をつなぐ生物多様性 -」

（平成 22 年 7 月 24 日（土）～10 月 8 日（金）（当初予定は 9 月 20 日までだったが、会期延長した）

大阪市民にとって「母なる川」ともいえる淀川流域の自然環境の現状をとらえるべく、博物館と友の会会員を中心とする市民とが 2007 年に淀川水系調査グループ『プロジェクト Y』を結成し、水系内の自然環境調査を進めてきた。本特別展はプロジェクト Y の活動の集大成として位置づけ、この調査成果をもとに、淀川の今の姿が一目でわかる「大図鑑」をコンセプトとした展示を制作した。この展示を通して、都会に残された淀川という大自然と、私たちがそれをどのように守っていくべきかを提言した。

なお、当館では、本展を外部評価の対象事業とした。

(3) 特別陳列「三木茂博士が収集したメタセコイア化石と水草標本」

会期：平成 22 年 7 月 24 日～10 月 31 日

会場：自然史博物館 本館 2 階 イベントスペース

3. 調査・研究事業

学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、「淀川水系の水質・生物調査」等の学芸課をあげて取り組み市民も巻き込んだ調査活動、「西日本自然系博物館ネットワークによる G B I F 事業」等の博物館連携による調査研究、を実施してきた。その成果は、館が刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、特別展や講演会を通じて市民に普及した。

なお、文部科学省科学研究費補助金は基盤研究 5 件、若手研究 2 件（合計 610 万円）を獲得した。その他の外部資金についても、2 件の助成金（493 万円）を受けた。

・第 3 回国際メタセコイアシンポジウムの開催

三木茂博士が化石をもとにメタセコイア属を設立してから、70 周年になることを記念して世界のメタセコイア研究者が集う第 3 回国際メタセコイアシンポジウムを 2010 年 8 月 3 日～8 日に開催した。シンポジウムには海外 10 カ国からの参加者 29 名を含む 85 名

が参加した。合わせて開催した特別陳列は、7月24日～10月31日まで、常設展示の中で行った。

4. 教育・普及事業

当館では、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。普及教育事業の参加者総数は35,361人であった。

なお、各種行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。

(1) 野外観察会

自然史博物館の行事に参加したことのない人を主な対象とした入門的な「やさしい自然かんさつ会」、より詳しい観察の機会を求める参加者向けの「地域自然誌シリーズ」、「テーマ別自然観察会」、長居植物園をフィールドとした毎月実施している「長居植物園案内」「長居植物園案内-動物・昆虫編」、博物館の裏庭を利用して、その生物を継続観察している「ビオトープの日」などテーマ・対象など多彩な参加者層のニーズに合わせて開催している。実施回数や参加者は次のとおり。

「やさしい自然かんさつ会」(8回;749人)、「テーマ別自然観察会」(14回;502人)
「地域自然誌シリーズ」(2回;93人)、野外実習「植物の標本づくり」(1回;18人)
「長居植物園案内」(12回;736人)、「長居植物園案内動物・昆虫編」(11回;1056人)

(2) 室内行事

野外ではできない顕微鏡を使った観察などより詳しい観察を行うため、また入館者の満足度を高めることも目的として、子どもから大人まで各々を対象として、年間を通して計画的に館内で以下の事業を実施している。

「室内実習」(9回;213人)、「自然史オープンセミナー」(12回;595人)
「ジオラボ」(12回;415人)、「こどもワークショップ」(38回;2730人)
「標本同定会」(137人)「夏休み自由研究相談会」(26人)
「博物館たんけん隊」(2回172人)

また、一般の行事に参加することが少ない中学生・高校生を対象に、継続的な参加を意識した「ジュニア自然史クラブ」を運営している。

(3) 講演会等の開催

- ・日本鱗翅学会アサギマダラプロジェクト公開シンポジウム 5月8日 66名
- ・地球科学講演会「大阪の温泉は本当に温泉か?—大阪平野の地下水を可視化する—」
5月9日 163名
- ・講演とトーク「ふじつぼサロン」あなたをフジツボ漬にする午後 5月23日 103名
- ・わかったつもりを問い直す—生物多様性って何? 6月6日 109名
- ・普及講演会「メタセコイアと地球環境の歴史」 7月31日 64名

- ・音楽と自然のひろば（自然史トークと音楽団によるコンサート） 10月16日 800名
- ・2010年代のための里山シンポジウムどこまで理解できたか、どう向き合っていくかー
10月30日・31日 250名
- ・近畿の昆虫の自然史～山本博子さんを偲んで～ 3月13日 103名

5. 学校・市民等との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員や教員を目指す大学生・自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を計画的に実施してきた。学校向けには、展示解説や標本など博物館資料の貸出し、学校教育を支援してきた。200人以上の市民が参加したプロジェクトY淀川の生き物調査は、4年間にわたって実施し、研究成果をとりまとめるとともに、特別展「みんなでつくる淀川大図鑑 - 山と海をつなぐ生物多様性 -」を開催した。引き続きプロジェクトU「都市の自然・生物相」調査の取り組みを始めている。「NPO大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めている。

6. 情報発信、広報宣伝

インターネット導入後に開設したホームページは、ジャストタイムで内容豊富な情報発信ができています（平成22年度のHPアクセス数（トップページ）は約42万件）。また、昨年からは開始した「Twitter」では、自然史博物館の情報に、より手軽に接することができている。そうした中、3月11日の東日本大震災後では、当館が中心になって全国の博物館が連携し、被災した陸前高田市立博物館の植物や昆虫標本などの修復に協力していることを発信した。

また、紙媒体のチラシやポスターの効率的な配布や、地域情報誌への掲載もより広範囲に取り組んでいる。

7. 来館者サービスの向上

「花と緑と自然の情報センター」には、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーがあり、常時、学芸員を配置して質問等にも対応することで、多くの市民の学習の場になっている。また、本館ミュージアムサービスセンターには教育スタッフを配置して学校対応や市民サークルへの窓口となっている。常設展では、来館者向けイベントの「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」に加え、展示するナガスクジラの骨格標本「ナガスケ」のジャンボ紙芝居も加わり、多くの来館者から好評を得ている。

8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持

管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、長居パークセンターと防火訓練を実施し、協業体制の充実を図った。

9. 友の会

昭和 25 年の自然科学博物館が発足した当初から、多くの市民が参加する「自然史博物館友の会」（現在会員数 1,755 名）並びに「NPO大阪自然史センター」と密接に連携し、博物館事業をより市民ニーズに即したものとしてきた。友の会行事は、積極的に公開し、一般の人々の参加も可能にしているため、参加者の満足度も高く、友の会への関心が高められた。

4. 大阪市立美術館管理運営事業

住吉大社御鎮座 1800 年を迎え、特別展示として開催した「住吉さん」は住吉大社の全面的な協力を得て、展覧会にするには難しいと言われる神道文化を多様な資料を駆使して完成度の高い展覧会になったとの評価を得た。また、住吉大社の神楽舞、住吉踊、和歌等の行事を多数企画・実施し、参加者からも良い評価を得た。

鴻池コレクション扇絵名品展では、大阪歴史博物館で夏季に開催した「華やぎの装いー鴻池コレクション」展と連携して、広報や講演会の協力を行った。

夏期の常設展においては、「怪（あやかし）～お化けの世界～」と題した児童・生徒に馴染みのありそうな展示をし、あわせて特別に落語会などの集客イベントも開催した。

1. 資料の収集・保管事業

- ・富本憲吉作品 100 件（陶磁器 80 件・資料類 20 件）と、和気史郎作品 47 件（油彩 46 件・デッサン 1 件）について、それぞれ個人から寄贈の申し出を受け、書類を整えてゆとりとみどり振興局博物館群（以下、「博物館群」という。）に上申した。
- ・鍋島藩窯作品 118 件、イスラム陶器 2 件、有田焼の磁器 4 件、石造彫刻 2 件、根付類 8 件について、それぞれ個人から寄贈の申し出を受け、評価委員会を開催し、書類を整えて博物館群に上申した。
- ・寄託作品の受入れ（18 件）および返戻業務（15 件）を実施した。
- ・中央収蔵庫の燻蒸を実施した。

2. 展示事業

(1) 常設展示

美術館所蔵のコレクションの中から、日本、中国等の東アジアの品を中心とした展示を 11 回、218 日開催し、延べ 13,653 人の入場者を得た。

- ・特集展示（常設展示中で特に大きくテーマを持たせた展観）

「草花のいろどり」として平成 22 年 6 月 11 日から 6 月 20 日、7 月 6 日から 7 月 19 日の 22 日間開催した。

また、本年度に受贈した辻本コレクション「富本憲吉展」を平成 23 年 1 月 5 日から 2 月 13 日まで 35 日間開催した。

(2) 特別展示

- ① 鴻池コレクション扇絵名品展（平成 22 年 4 月 13 日（火）から 5 月 30 日（日）まで 43 日間、観覧者数 19,710 人）

大阪の豪商・鴻池家が収集した扇絵約 300 点を一堂に会した「鴻池コレクション扇絵名品展」を大阪市立美術館、太田記念美術館、日本経済新聞社の主催により、開催した。

- ② 第 56 回全関西美術展（平成 22 年 7 月 6 日（火）から 7 月 19 日（月・祝）の 13 日間、観

覧者数 7,640 人)

全関西美術展は、昭和 16 年に大阪市民の芸術振興を目的として、公募による総合芸術展「大阪市展」とし発足し、現在は、読売新聞社と共催し「全関西美術展」として開催している。近畿地方を中心として遠方からも幅広く出品されており、今年度は 904 点の応募があった。559 点が入選し、無鑑査・招待作家の作品を含めて 898 点の作品を展示した。

③住吉さん展（平成 22 年 10 月 9 日（土）から 11 月 28 日（日）まで 44 日間、観覧者数 42,054 人）

平成 22 年に御鎮座 1800 年をむかえる住吉大社の、信仰や歴史に関わる資料、絵画、工芸品などを「住吉信仰と住吉大社の歴史」「住吉神と和歌」「描かれた住吉のイメージ」「住吉の祭礼」の四つのテーマにそって様々な美術館・博物館、社寺や個人からあつめて展示し、大阪市立美術館、産経新聞社、NHK 大阪放送局、NHK プラネット近畿の主催により開催した。

④第 42 回日展（平成 23 年 2 月 19 日から 3 月 21 日までの 27 日間、観覧者数 76,018 人）

大阪展には全国巡回する基本作品 274 点に加えて、大阪・奈良・和歌山・兵庫の地元入選作品 367 点を陳列した。内訳は日本画 105 点、洋画 103 点、彫刻 57 点、工芸美術 76 展、書 300 点で、日展出品作家による作品解説を 2 月 22 日から 3 月 17 日まで 15 回開催した。

3. 調査・研究事業

館蔵品・寄託品作品に関する調査・研究のために、館内での調査研究とともに、近畿周辺の大学図書館・大阪府立図書館などで文献資料の調査をおこない、また美術館・博物館、社寺、個人と連絡を取って先方が所蔵する近世絵画、中国書画、漆工品、陶磁器、彫刻などの関連作品の調査・研究につとめ、合わせて近畿周辺で開催された展覧会の見学及び調査を行った。

寄贈、寄託の申し出のあった作品に関してその諾否のために調査・研究を行った。

特別展「住吉さん～住吉大社 1800 年の歴史と美術～」開催に向けて、大阪・住吉大社をはじめとして美術館・博物館、社寺、個人所蔵の関連作品の調査・研究を行った。

平成 23 年度に開催を予定する特別展「生誕 120 周年記念岸田劉生展」の出品交渉を兼ねて、美術館・博物館、社寺、個人所蔵の関連作品の調査・研究を行った。

4. 教育・普及事業

(1) インターン研修事業

近世絵画・漆工芸・仏教美術・教育普及の 4 分野計 5 人（内 1 名は就業のため修了せず。）の研修を行い、研修の成果として常設展における企画立案展示を学芸員とともに実習し、作品解説なども実施した。

(2) 博物館実習

21 校から 44 名の大学生を受け入れ、全関西美術展の受付・審査・陳列補助の実習と取り

扱いなどの講義を実施した。

(3) 記念講演会など（合計 15 回、総参加者数 2,368 人）

・特別展「鴻池コレクション 扇絵名品展」

計 4 回実施、外部講師 3 回（内 1 回は博物館連携として大阪歴史博物館学芸員）当館学芸員 1 回

ほかに、スペシャルトークイベントとして宮脇祥三氏（宮脇賣扇庵相談役）による扇のはなしと投扇興の実演を開催した。

・第 56 回全関西美術展

審査員（5 部門 5 人）による審査講評を授賞式とともに実施した。

・特別展「住吉さん～住吉大社 1800 年の歴史と美術～」

計 4 回実施、外部講師 2 回 当館学芸員 2 回

・第 42 回日展 出品地元作家 18 人による作品解説を 15 回実施した。

・その他

10 月 8 日（金）住吉区の主催による「すみ博 2010」との連携による特別展「住吉さん～住吉大社 1800 年の歴史と美術～」の解説

(4) 普及イベント（合計 15 回、総参加者数 1,689 人）

・特別展「鴻池コレクション 扇絵名品展」

呈茶席 茶道裏千家教授小林宗華社中、5 回実施

ミニコンサート 徳島文理大学メンバーによるミニコンサートを実施した。

・特別展「住吉さん～住吉大社 1800 年の歴史と美術～」

古典芸能（神楽舞・住吉踊り、和歌披講、神楽舞・田楽踊り・かつぼれ）3 回実施。

・博物館群（8ON）連携事業として

米朝事務所による「住吉さん落語会」（演者 4 人）を 11 月 5 日（金）に実施。

・第 42 回日展

日展作家プレゼント抽選会 日展出品中の地元作家提供によるプレゼント抽選会 5 回実施

5. 学校・市民等との連携

(1) 美術館へ行こう

小中学生を対象とした絵画教室「美術館へ行こう」を 2 回開催、大人を対象とした「美術館へ行こう」を 1 回開催し、合計 30 人の参加を得た。

6. 情報発信、広報宣伝

美術館ホームページにより展覧会スケジュール、内容等の各種案内を行っている。

展覧会のポスターやチラシの掲示を大阪市の広報板、協力をいただいているあべの地下街等の民間施設及び各美術館・博物館に依頼しているほか、市営地下鉄の中吊り広告の掲出も行

っている。また、新聞社、放送局と連携し、新聞への記事掲載やテレビ放映に努めている。

さらに、ホームページにおいては、より速報性と精度を高め来館者が「行きたくなる」ようなコンテンツを作成することとしている。

7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲート及び本館改札と総務課との連絡を密にし、ゲートでの図録販売、来館者に親切な案内板の的確な設置などお客様のニーズをくみ上げ、必要であれば即実践することにより財団ならではのサービスを実施している。

8. 施設の維持管理

警備・清掃・設備管理及び保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めている。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、天王寺消防署の全面協力のもと、AEDの使用方法も含めた防火訓練も行っているところである。なお、設備関係の老朽化が進んでおり、いずれの機器も取り換えが必要であるが、予算上の制約もあり優先順位をつけて改修にあたっている。また、局による改修計画とも連携しながら維持管理に努めている。

9. 友の会

友の会ニュースを6回発行し、野外写生会を6回（6月、7月の写生会は雨天のため中止）、一泊写生会を1回、見学会を3回、友の会の展覧会として、7月20日から25日に夏季展、新春友の会展を1月6日から10日に開催した。

今年度の会員は746人で、昨年度から64人の減となったが、毎月日曜日に開催している友の会の参加者は増している。

10. 美術研究所

美術研究所は、昭和21年に開設された絵画の教育機関であり、関西を基盤として活躍している質の高い画家が講師として日々の指導を行っている。

受講生は、月曜日から土曜日に随時受講・指導を受け、実技コンクールのうえ順次課程を修了する。入所検定は4月、10月、1月に行い、それぞれ13人、20人、4人の入所者があった。その結果、平成22年度研究生は140人となり前年度より7人減となった。

また、美術研究所の絵画コンクールを6回開催し、研究所展覧会、絵画作品批評会を各1回開催した。

さらに、小中学生を対象とした絵画教室「美術館へ行こう」を2回開催、大人を対象とした「美術館へ行こう」を1回開催した。

5. 大阪市立東洋陶磁美術館管理運営事業

12月から2月にかけて開催した特別展「ルーシー・リー展」で予想をはるかに上回る約5万6千人（当館特別展入館者数としては歴代2位）の入館者を迎えることが出来た。同展は東洋古陶磁にも影響を受けた英国の陶芸家ルーシー・リーの没後初の本格的な回顧展で、現代陶磁や西洋陶磁も鑑賞したいというニーズに応えたもので、デザイン性が高く効果的なポスターやメディアとの連携により、当初からの目標とした若い世代や女性層といった新しい入館者の獲得に成功した。

1. 資料の収集、保管事業

芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入について推進し、寄附の申出が2件（作品数55件1192点、評価額4,038万円）あった。

さらに、展示事業や研究用として、東洋陶磁その他美術に関する研究資料、文献、写真等として書籍605冊、DVD10件を収集した。

また、常駐警備及び厳重な保管設備により作品の安全性を確保するとともに、免震展示ケースの設置を推進した。

2. 展示事業

(1) 常設展示（平常展示 平成23年2月22日～3月27日 開催日数30日、観覧者数3,020人）

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、李秉昌コレクションの韓国陶磁、日本陶磁の中から代表的作品を中心に約300点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示した。あわせて、沖正一郎コレクションの鼻煙壺約100点を展示し、陶磁器以外にも中国の美術工芸品を紹介した。

また、常設展示に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約20～30点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催した。

「中国陶磁の美」（平成22年4月10日～7月25日）

「高田コレクションペルシアの陶器—オリエントの色彩とデザイン」

（平成22年8月7日～11月28日）

「福島サト子氏寄贈—川崎毅展」（平成22年12月11日～平成23年3月27日）

(2) 企画展示（開催日数190日、観覧者数32,810人）

① 「高麗時代の水注」（平成22年4月10日～7月25日、開催日数92日）

高麗時代(918～1392)には青磁を中心として数多くの陶磁製水注が作られた。中国から伝わった水注は、繁栄する高麗の仏教や生活様式の変遷のなかで様々に形を変えながら、12世紀を中心として多彩な展開を遂げた。本展では館蔵品を中心に約30点を展示し、高麗青磁水注の誕生、高麗独自の装飾性、仏教や貴族文化での用途、遺跡から出土した水注の意味について、4つに分けて絵画パネルなどを用いてその見所を紹介した。

講演会や研究会などを充実させ、一般に知られていなかった高麗水注の魅力を多方面で紹介し、入館者へのアンケートは、回答者の94%が満足したとの回答を得た。

②国際交流企画展「幻の名窯南宋修内司官窯—杭州老虎洞窯址発掘成果展」

(平成22年8月7日～11月28日、開催日数98日)

杭州市文物考古所によって発掘され、2001年に中国の十大考古発見の一つに選ばれた杭州市老虎洞窯址の考古発掘成果を日本で初めて紹介した。老虎洞窯址は長い間謎であった中国青磁の最高峰の一つ南宋修内司官窯と考えられており、老虎洞窯址の出土資料54点により、南宋官窯青磁の謎と魅力に迫った。中国国外では初めての紹介となった本展は、国内外から多くの注目を集め、主要新聞や美術雑誌などにも取り上げられ、入館者からも「割れて欠けてもなお鑑賞に耐えうる青磁の素晴らしさに感動した」など好評であり、84%以上が満足とのアンケート結果となった。

(3)特別展示(開催日数51日、観覧者数56,634人)「ルーシー・リー展」

(平成22年12月11日～平成23年2月13日)

ウィーンに生まれロンドンで活動した20世紀を代表する陶芸家、ルーシー・リー(1902-1995)の没後初の回顧展として、国内外の作品約200点と豊富な関係資料を紹介した。主要新聞・美術雑誌やテレビ番組で紹介されたとともに、広報ポスターなども評判を呼び、400件を超える入館者のブログ等、ロコミの効果も大きく、約5万6千人の来館客数を記録した。講演会やワークショップ等関連行事も充実させ、専門家からこれまで陶芸に関心のなかった新規入館者層まで、幅広い入館者層の支持を得ることができた。なお、当館における外部評価は、本展を対象に行った。

3. 調査研究事業

展示事業に関する調査研究として、高麗時代の水注に関する資料調査、杭州老虎洞窯址に関する出土資料や窯址の調査並びにルーシー・リーに関する資料調査をそれぞれ実施した。また、韓国陶磁調査研究事業として「中期高麗青磁の研究」をテーマとして韓国や中国の出土資料や窯址等の調査と公開講座を実施した。

なお、外部資金による研究では、科学研究費補助金計5件(計370万円)を獲得し、同基盤研究(B)海外1件、同基盤研究(C)1件、同若手研究(S)1件、同若手研究(B)2件を実施した。

4. 教育普及事業

(1)講演会等の実施

展覧会の内容の理解や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催した。

① 講演会

「高麗時代の貴族文化」矢木毅氏(京都大学人文科学研究所)他計4回、参加者計237人

② 講座

李秉昌博士記念公開講座「中世の沈没船の謎」森平雅彦氏（九州大学）・崔鉦植氏（木浦大学）・金愛敬氏（国立海洋文化財研究所）他計4回、参加者計299人

③ 学芸員アフタヌーン・レクチャー

第12回「国際交流特別展「北宋汝窯青磁—考古発掘成果展」の総括と展覧会記録映像特別上映」小林仁（当館主任学芸員）他計9回、参加者数計194人

④ 東洋陶磁学会、民族藝術学会などとの提携による研究会などの開催

「水注のある暮らし」鄭銀珍（当館学芸員）他計2回、参加者数計31人

(2) ボランティアによるガイド事業

常設展・企画展の展示期間中、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによるギャラリーガイドを行った。（172回、2109人）

団体見学者については、平日も予約によるガイドを実施した。（47回、789人）

ボランティアガイド事業の充実を図るため、展覧会ごとに学芸員が研修を行った。

5. 各種団体との連携

効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実のため、中央公会堂、中之島図書館、中之島4117、国際美術館等、とくに中之島地域の各種団体、学校、地域活性化計画、周辺各施設との連携を図った。

6. 他の博物館等との連携

国内外の美術館、博物館、研究機関等との多角的な連携による共同研究、展覧会の共催、シンポジウム・研究会の開催等の事業推進を行った。

①国際交流企画展「幻の名窯南宋修内司官窯—杭州老虎洞窯址発掘成果展」における中国・杭州歴史博物館との協力提携

②九州国立博物館への館蔵品の長期貸出と図録の作成による提携

③栃木県立美術館での濱田庄司展への貸出と企画協力

④特別展「ルーシー・リー展」のための東京国立近代美術館、国立新美術館、益子陶芸美術館、MOA美術館、パラミタミュージアム、山口県立萩美術館・浦上記念館との展示協力

⑤ベルリン国立東アジア美術館への長期貸出の継続

7. 情報発信・広報宣伝

ホームページ、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マス・メディアの活用などにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知させた。また、入館者に対するアンケート調査（通常アンケートと展覧会評価アンケートの2種）を展覧会ごとに実施し、入館者のニーズを把握して事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に活かした。

8. 来館者サービスの向上

案内サインの改善、展示品のわかりやすい説明など観覧者に配慮した環境作りを行ない、受付窓口で寄せられる利用者の要望やアンケート調査の結果など、市民の生の声を的確に美術館運営や展覧会に反映させ、来館者のサービスの向上に努めた。

9. 施設の維持管理

入館者が安全かつ快適に施設を利用できるよう全ての施設、設備の適切な維持管理を行った。警備・受付案内・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、館職員だけでなく、業務委託業者や喫茶、売店の従事者も一体となって防火訓練を実施し、有機的かつ効果的な防災体制の充実を図った。

10. 出版等事業

展覧会図録（企画展「高麗青磁の水注」、国際交流企画展「幻の名窯南宋修内司官窯—杭州老虎洞窯址発掘成果展」、特別展「ルーシー・リー」、特集展「福島サト子氏寄贈—川崎毅展」など）の製作販売並びにミュージアムグッズの販売を行った。特に「ルーシー・リー展」図録は9,444冊（入館者6人に1人の割合）の販売を記録した。

11. 友の会事業

講演会、研究会、研修や友の会通信の発行などを通して会員へ東洋陶磁に関する情報提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図った。

6. 大阪城天守閣管理運営事業

秀吉が天下統一の過程で戦った武将たちを取り上げて、国宝や重要文化財を多数展示した特別展「秀吉への挑戦」は、国内外の来館者から高い評価を得た。また、年間 10 本の常設展、豊富な考古資料の存在と魅力を伝えたテーマ展などの展示事業や普及事業を実施した。さらに、大阪城の魅力を高めるために、重要文化財の特別公開をはじめ季節ごとにイベントを開催するとともにメディアへの積極的な情報提供に努め集客を図った。その結果、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響を受けたにもかかわらず、前年度比 9.6%増の約 137 万人の来館者を受け入れることができた。

1. 資料の収集、保管事業

豊臣氏六大老の連署になる「大坂城中壁書」をはじめ、近年注目されている「島左近画像」や大坂の陣のおりの「林羅山書状」など、資料的価値が高く展示にも有効に活用しうる資料を 8 点、購入により取得した。また、大坂の陣で活躍した木村長門守の所用と伝える「大身槍穂先」をはじめ、6 件 8 点の寄贈の申し出を受けるなど、資料の獲得に努めた。

2. 展示事業

(1) 常設展示

2 ヶ月を目途に文化財展示を全面的に更新し、そのつど 3 階・4 階のフロアごとに、新しいテーマの展示を立案した。「豊臣一族～その数奇な運命～」 「大坂の城と町―豊臣から徳川へ―」 「戦場のいでたち」 「浪人―乱世におけるもう一つの主役―」 など、年間 10 本のテーマで展示した。

(2) 特別展

「秀吉への挑戦」 (平成 22 年 10 月 9 日～11 月 14 日)

秀吉が天下統一の過程で戦った武将たちの生きざまをゆかりの資料で紹介しながら、秀吉という人物、さらには秀吉の築き上げた豊臣政権の性格について探った。全国各地の戦国武将を多数取り上げて、重要文化財 7 件 (うち 2 件は国宝) を含む多種多様な文化財を 48 の機関および個人から借用し、来館者に楽しんでもらうことができた。アンケート結果によると展示は日本人・外国人を問わず、来館者から高い評価を得た。

なお、当館では本展を対象に外部評価を実施した。

(3) テーマ展

① 「地中からの遺産―大阪城天守閣収蔵考古資料展―」 (平成 22 年 3 月 20 日～5 月 5 日)

昭和 6 年 (1931) の開館以来、郷土博物館として運営されていた大阪城天守閣は、重要美術品の「人馬小埴装飾付器台」など著名な資料のほか、弥生土器や古代寺院の瓦など郷土大阪にとって重要な考古資料の優品を多く収蔵保管している。本展ではそれら豊富な考

古資料の存在と魅力を来館者に伝えた。

②「南木コレクションシリーズ第 11 回 瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史」（平成 23 年 3 月 19 日～5 月 8 日）

幕末、大坂の人々は、外国船の来航、災害、社会の混乱といった、かつてない厳しい現実にも否応なく向き合い、徳川幕府の滅亡という歴史上の大事件に遭遇した。大阪城天守閣が所蔵する多数の瓦版には、そうした出来事が独特の方法で表現されている。本展ではそれら瓦版 75 点を関連資料とともに紹介して、庶民の目からみた幕末大坂の世相を浮かび上がらせ、観覧者から好評を得た。

3. 調査・研究事業

「豊臣時代資料・史跡調査」として、秀吉の備中高松城水攻め講和のさい切腹させられた高松城主清水宗治の関連資料および史跡である岡山県総社市の清水家文書および清水家墓所などの調査を実施した。また「徳川時代大坂城関係資料調査」として、滋賀県甲賀市にて同市所蔵「水口藩加藤家文書」に含まれる大坂加番関係資料の調査を実施した。

『大阪城天守閣紀要』38 号、『徳川時代大坂城関係史料集』14 号を刊行して、調査研究の成果を公表した。

4. 普及事業

(1) 教育普及

大阪城内や大阪市内外で開催された講演会・シンポジウム・史跡見学会等に積極的に講師を派遣し（延べ 45 人）、歴史や資料に関する知識の普及をはかった。館内に兜・陣羽織（レプリカ）の試着体験コーナーを設け、希望者（年間を通じて約 2 万 9 千人）に体験の機会を提供した。また、市内の小・中学校と連携して「大阪城写生画展」を開催した。

「第 39 回大阪城写生画展」

大阪の将来を担う小学生・中学生が大阪城を大阪の誇りに思い、憩いの場としてより一層親しむと同時に、大阪の歴史・文化についての理解を深めることができるよう、大阪市内の小・中学生を対象に大阪城の写生画を募集し、入選作品を展示した。

会 期	平成 22 年 1 月 2 日（日）～1 月 31 日（月）		
会 場	大阪城天守閣 2 階展示室		
応募数	小学 9 校 582 点 中学校 1 校	11 点	計 593 点
表彰作品数	学校賞（大阪市長賞）	3 校	
	個人賞 優秀賞（大阪市長賞）	27 点	
	佳作賞（大阪市博物館協会会長賞）	54 点	

(2) 資料の活用・普及

収蔵品や関連資料の写真を作成管理し、公共機関や研究者、出版・放送関係機関等から

の掲載や複製作成、商品化の要望に応じ積極的に提供することで、資料の普及に努めた。
写真資料の提供数は 639 件 1,794 点におよんだ。

他の博物館施設等からの文化財貸出依頼に対しては 33 件 144 点に応じ、展覧会の企画や展示指導等に関する「特別協力」依頼に対しては 4 件に応じた。

収蔵品図録や展覧会図録、名品絵はがき、館蔵品目録、大阪城の案内書等を作成し、頒布した。

5. 史跡の活用・普及事業

重要文化財に指定されている城内古建造物の特別公開を行うほか、訪れた人々が大阪城や大阪の歴史・文化を身近に感じていただけるような次のイベントを季節ごとに開催し、大阪城の魅力を高めるとともに集客に努めた。

(1) 文化集客イベント

① 「大阪城ファミリーフェスティバル 2010」 (会期中の入場者数 42,942 人)

- ・会 期：平成 22 年 5 月 1 日 (土) ～5 月 4 日 (火・祝)
- ・会 場：大阪城本丸広場
- ・内 容：天守閣前特設ステージでは、大阪城の歴史・文化が体感できる歌や踊り、太鼓の他、クイズなど盛りだくさんなイベントを開催した。

② 「大阪城七夕まつり」

- ・会 期：平成 22 年 7 月 3 日 (土)～7 月 4 日 (日)
- ・会 場：大阪城天守閣小天守及び会議室
- ・内 容：願い事を書いた笹飾りや工作教室を開催した

③ 「大阪城夢祭 2010」 重要文化財「千貫櫓・多聞櫓・金蔵」特別公開

- ・会 期：平成 22 年 10 月 9 日 (土) ～10 月 11 日 (月・祝)
- ・会 場：千貫櫓・多聞櫓・金蔵
- ・内 容：重要文化財の多聞櫓・千貫櫓・金蔵の内部を 4,629 人に公開した。
公開に際し、幕末の解体修理の際に出たと思われる古瓦、大阪城石垣の石に刻まれた刻印の拓本等を展示したほか、多聞櫓内において、大阪城の発掘調査の際の映像を常時放映した。

④ 「迎春イベント」 (会期中の入場者数 18,909 人)

- ・会 期：平成 23 年 1 月 2 日 (日) ～1 月 5 日 (水)
- ・会 場：大阪城天守閣内
- ・内 容：秀吉も好んで通ったといわれている有馬温泉「太閤の湯」の足湯体験や甘酒・しょうが湯の振る舞い、また、連日、元気で賑やかな伝統話芸のパフォーマンスを繰り広げるなど、盛りだくさんのイベントを開催した。

(2) 姉妹城・友好城郭連携事業

オーストリア・エッゲンベルグ城との友好城郭連携事業の一環として、グラーツ武器博物館展開催にむけての準備をすすめた。また、同城との友好城郭提携1周年を記念して、『「豊臣期大坂図屏風」ふたたび』を7月17日より10月7日まで4階展示室にて開催した。10月2日・3日には記念イベントとして大阪市主催で本丸広場においてオーストリア物産展・宝探しゲームなどが行われ、天守閣2階会議室においてもパネル展を開催した。

上田城との友好城郭連携事業として、長野県上田市・和歌山県九度山町・南海電鉄とともに南海なんば駅前で戦国武将“真田幸村”を利用した大阪活性PRイベント「大阪の陣～戦国武将真田幸村が南海なんば駅に出陣！」を開催した。

6. 地域・市民等との連携

地域・市民団体や企業、大阪城公園内および周辺イベント（大阪平成中村座、大阪ウォーク2010他）などと連携し、相互に広報しあったり、共通入場割引を実施したりすることで、集客効果を高めた。

7. 情報発信、広報宣伝

国際的金融危機に端を発する国際経済の沈滞化や円高の進行に加え、政治情勢の影響などによる国内外の観光行動が減少している厳しい状況の中、大阪を代表する施設にふさわしい特別展、テーマ展及びイベント等を実施するとともに、ホームページ・ポスター・チラシ・リーフレット（日本語、韓国語、中国繁体字、中国簡体字、英語の各言語別及び子ども向け）・マスメディア等をとおして、幅広い効果的な情報発信・広報宣伝を行うことにより、一層の集客力の向上に努めた。

(1)印刷物

種別	内容	主な配付先・掲出先
ポスター	特別展、テーマ展、夏季夜間開館、櫓の特別公開など	区役所、大阪市関係施設、観光案内所、府下市役所・町村役場、OCTB会員宿泊施設、交通機関、在阪都道府県事務所など
	特別展、テーマ展など	区役所、大阪市関係施設、観光案内所、府下市役所・町村役場、OCTB会員宿泊施設、交通機関、在阪都道府県事務所など
リーフレット	天守閣内案内	来館者、ホテル等宿泊施設、旅行社など

上記以外に、大阪城天守閣をはじめとする大阪城の魅力を紹介するパンフレットを日本語、韓国語、中国繁体字、中国簡体字、英語の各言語で作成し、国内外のプロモーションや観光展等において旅行エージェント等業界関係者への配付や大阪市内各ホテルへの配付を行った。

(2) ホームページ

展示情報やイベント情報については随時更新を行い、最新の情報発信を行った。トップページの「今週の大阪城」は毎週更新を行い、大阪城天守閣だけではなく大阪城公園の様子などについても情報発信を行い、閲覧者の好評を得た。

また、海外からの来城者へ情報発信を行うため、韓国語、中国繁体字、中国簡体字、英語のページを作成した。

(3) 駅広告掲出

大阪城天守閣の最寄り駅である地下鉄中央線谷町四丁目駅にアドマークポイント広告を掲出し、特別展や夏季夜間開館期間などでは張替えを行うなどにより 1 年を通じた集客広報を実施した。

また、平成 20 年 3 月から地下鉄最寄駅に電照看板等を設置し、天守閣来館に便利な出口の案内を行った。

8. 来館者サービスの向上

改札・インフォメーションにおける外国語対応及び音声ガイドシステムの拡充ならびにリーフレット、館内サイン、文化財展示解説などの外国語表記にとりくみ、館内案内の充実を図った。

9. 大阪城天守閣売店の運営

天守閣売店の管理運営形態を見直し、経費削減に努めるとともに、ホームページを活用し、季節ごとの売れ筋商品を紹介する等広報活動を充実させ収入確保に努めた。

10. 施設の維持管理

改札・案内・警備・清掃・昇降機の運転業務を業務委託により実施するとともに設備等の定期的な保守点検を実施し安全で快適な施設の維持管理に努めた。

7. 総務部の連携事業等

法人発足と同時に、協会各館が相互に連携した事業、外部の関係機関と連携した事業、協会としての広報活動、さらには事業評価や学芸員の資質向上に取り組むため、総務部に事業企画課を設置し、次の事業を実施した。

1. 法人独自の連携事業

自然史博物館と歴史博物館が、淀川をテーマにした特別展での合同イベントや相互広報などを行ったり、国際博物館の日に各館が共同し、法人の設立記念シンポジウムを開催するなど、複数館による連携事業を展開した。

大阪市立大学と、年度末に包括連携協定を締結し、学術部門をはじめ、学生支援や教育普及、地域貢献など広範な事業での連携を図ることとした。あわせて、学生等を対象としたキャンパスメンバーズ制度を創設し、市立大学に加え、大阪大学も加入の運びとなった。また、大阪産業創造館の協力を得て企業提案を募ったところ、150社以上から、400件近い提案が寄せられ、民間の視点や感覚だけでなく、新たな手法・技術の導入に向けた展望が開けた。

2. 80N等の外部との連携事業

大阪市が平成19年度から、「80N（エイトオン）」の名の下で展開してきた共同事業を、新たに協会が推進役となり、協会各館に大阪市立科学館、天王寺動物園、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室を加えた8施設で実施した。具体的には、市民向け連続講座（9回）や共同キャンペーンとしての「ミュージアムウィークス大阪2010」を実施するとともに、各施設で館の事業とリンクした伝統芸能の鑑賞やこども向けワークショップなどの文化連携事業を合計13回、開催した。また、80Nニュースやポスター等の掲出、「ミュージアムガイド2010」作成による広報活動などを展開した。他に、生涯学習情報発信ウィークへの出展、隣接するNHK大阪放送局が実施する季節イベントへの参画などを通じて、法人や大阪市の事業のPRに努めた。

3. 情報発信

上記の連携事業や法人全般に係わるさまざまな情報を迅速かつ効果的に発信するため、5月に法人独自のホームページを立ち上げるとともに、新たに法人に加わった市立美術館のホームページについても、迅速かつ丁寧な情報が自前で発信できるよう、全面改定を行った。

また、協会の概要を紹介するパンフレット（A3判二つ折）を作成し、さまざまな機会に協会を紹介する資料として配布・活用した。

4. 評価や研修

事業における効果の検証とそれによる一層の内容充実をめざし、各館が実施する特別展事業を対象に、外部評価を実施した。評価は、定量・定性の両面から共通の指標に基づき内部評価（自己点検）を行い、その結果に対して外部委員から評価を受けた。

また、学芸員を対象に、次年度以降に各館で導入が予定されている LED について、先行導入の実績がある他館から講師を招き、知識の習得に努めた。

以上の協会内、あるいは外部関係機関を含めた連携を通じて、単独館ではできない事業内容の充実、幅広い分野・方向からの情報提供、各館から他館への回遊性の向上など、相乗効果を引き出すことができた。また、民間企業との連携、外部評価や研修を通じて、外部（第三者）の意見やニーズに接することができ、今後、事業へ反映することでさらなる内容の充実に努めたい。